

最優秀賞

「すうちゃんの頭の中の消しゴム」

花田小学校 3年 宮園 みなみ

「すうちゃん、おかえり。まってたよ。」

わたしは、すうちゃんにとびついた。

「みいちゃん、ただいま。大きくなったね。」

3年ぶりに会うすうちゃんは、少しもかわっていないように見えた。

すうちゃんは、わたしのおばあちゃんのお姉さん。すごく元気な88才のおばあちゃんだけど、ふしぎと「おばあちゃん」というより「すうちゃん」という方がぴったりくる。わたしとお兄ちゃんは、すうちゃんが大好きだ。わたしが小さいころに大阪の息子さんの所にひっこした。それまでは、いっぱい遊んでもらったことを今でもよくおぼえている。

夏休みに入ってすぐ、すうちゃん家族がひさしぶりに帰ってきた。でも、次の日、すうちゃんを残して家族の人たちは、もどっていった。わたしの家族とすうちゃんとの生活が始まった。毎日、手をつないでさんぽに出かけた。本を読んだり、パズルもいっしょにしたりもした。楽しい時間だけど、前と何かがちがう。

「みいちゃんは、いくつになったの。学校は、どうしたのね。」

「すうちゃん、もう夏休みだから学校には、行かなくていいんだよ。」

「そうなんだね。もう夏休みなんだ。」

すうちゃんは、はじめて聞くみたいにびっくりしていたけど、これで、もう5回目。また、同じこと言ってる。すうちゃん、どうしちゃったのかな。でも、おばあちゃんもお母さんも何事もないようにふつうにすうちゃんと話をしていた。

わたしは、思い切ってお兄ちゃんにきいてみた。

「みなみ、すうちゃんは『にん知しよう』という病気なんだよ。同じことを何度も言ったり、思い出をわすれたりしてしまうんだ。」

と、わたしにも分かるようにせつめいしてくれた。近くで聞いていたお母さんが、

「年をとったら、思い出をわすれてしまうことがあるんだよ。頭の中の記おくがまるで消しゴムで消えちゃうみたいだね。でも、すうちゃ

んどの楽しい思い出は、みいちゃんが、おぼえていけばいいんだよ。」とやさしく話しかけてきた。

「うん。そうだね。すうちゃんといっぱい思い出をつくるよ。」にん知しようのすうちゃんもわたしは大好きだ。すうちゃんは、すうちゃんだもの。

すうちゃんとすごした2週間は、あっという間だった。お別れの日、すうちゃんは、

「楽しかったよ。来年もくるからね。みいちゃん、まっけていてね。」とずっと手をふってくれた。わたしも、

「すうちゃんの頭の中の消しゴムが、わたしのことを消しませんように。わたしたちのことをずっとおぼえていてくれますように。」と、ねがいをこめて手をふり続けた。

